

**「七里の渡し」を通った大名行列など**

「七里の渡し」を渡った旅人などの資料は桑名にも熱田にも残っていないので、具体的なことははっきりしない。ただ天候によって欠航することも多かったようで、そのバイパスとして、桑名から川路を佐屋へ渡たり、佐屋から陸路を宮へ行く、「三里の渡し」が寛永 11（1634）年から始まったが、公的な大名行列などは「七里の渡し」を通るのが主で、「三里の渡し」は悪天候など例外的であった。それは「三里の渡し」及びそれに伴う佐屋路は大量の通行には設備が十分でなかったからである。しかし幕末には將軍を始め「七里の渡し」より「三里の渡し」が主として使われるようになった。



佐屋宿（『佐屋村誌』より）

庶民の団体旅行である伊勢参宮は初期から「三里の渡し」が多く使われた。その理由は津島神社にも参拝する機会が多かったからである。

津島神社には御師（おし）が 30 軒（幕末）あった。伊勢神宮の御師（おんし）と同じく、諸国を廻って参拝者を勧誘して、彼らが参拝の際には御師宅に泊めて接待した。御師宅のうち、現在残っているのは氷室作太夫宅のみだけで、津島市の所有となり、市文化財に指定されている。かなり傷んでおり、民間の「氷室作太夫家住居の保存活用を進める会」が結成され、津島市でも保存・活用を図っている。



現在の氷室作太夫宅

「七里の渡し」を通った大名行列の最大は御三家の紀州藩である。伊勢路には紀州藩の領地が多いので、和歌山から紀の川を遡り、高見峠から伊勢路に入り、伊勢湾岸の白子（紀州領）から、または桑名から「七里の渡し」を宮（熱田）へ渡った。このコースでは紀伊半島の険しい山路を通るが、紀州藩の参勤交代は約 1000 人の大行列であり、紀州藩以外の大名行列はないし、本陣や宿屋などの設備も充分でなく、日時も経費もかかるため、元禄 14（1701）年からは和歌山から大坂へ出て、京都から東海道を草津で別れ中山道を通り、垂井から美濃路を通り、熱田から東海道を江戸まで通行した。しかし慶応 4（1868）年 6 月には紀州藩の最期の藩主徳川茂承の夫人・倫宮則子が江戸からの帰路に通っている。彼女が泊まった波瀬本陣の建物は慶応 3 年の建築で現存しており、付近一帯は波瀬宿の雰囲気は今も残している。